

令和 7 年 5 月 1 9 日
徳島大学教養教育院
教養教育プログラム評価委員会

1. 総評

教養教育プログラム評価委員会は、令和 6 年度に実施した徳島大学「データサイエンス学修プログラム」に対し教養教育院が提供する授業について、FD を通して点検と評価を行った。本プログラムは、令和 3 年度から開始しているリテラシーレベルおよび令和 5 年度から開始している応用基礎レベルの教育を提供し、令和 6 年度で 4 年目を迎えた。授業評価アンケートから、多くの学生が授業内容を高評価し、継続して友人や後輩に推薦したいと回答している。令和 6 年度の修了者数は収容定員の 20% を達成し、前年より進歩した。応用基礎レベルの教育においても修了者が増加し、収容定員の 9% に達したことは評価できる。さらに、今年度は初めての卒業生を輩出した。

2. 「学内からの視点」における自己点検・評価の結果

・プログラムの履修・修得状況

本プログラムのリテラシーレベルは、「情報科学入門」と「データサイエンスへの誘い」という二つの授業によって構成されている。これらの授業は、数理、データサイエンス、AI 教育の強化を目指すコンソーシアムによるモデルカリキュラムに準拠した内容である。「情報科学入門」は必修科目であり、令和 6 年度には全学部から 1,302 名の学生がこの授業を修了した。「データサイエンスへの誘い」は選択科目であり、合計 371 名が修了した。両科目を受講し、本プログラムを修了した学生は 326 名となった。

また、令和 5 年度からは、応用基礎レベルに対応するために「AI 総合演習」という新たな授業が設けられている。この授業により、令和 6 年度の教養教育の授業を利用した応用基礎レベルの修了者数は 239 名となった¹。

これらの取り組みにより、本プログラムは、リテラシーレベルと応用基礎レベルの両面で充実し、教養教育の質と範囲の向上を図っている。

・学修成果

授業評価アンケートにおいて、「情報科学入門」「データサイエンスへの誘い」「AI 総合演習」の全科目で、90%以上の学生が授業に対して積極的に取り組んだと回答した。特に、AI 総合演習では実践的課題に取り組む学生の意欲が高く評価されている。

・学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

授業評価アンケート結果から、「理解度に配慮した授業でしたか？」という質問に対し、各科目とも約

¹ 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度(応用基礎レベル)は、学部の専門授業を用いた場合もあるが、ここの集計からは除外している。

90%の学生が肯定的に回答した。また、「将来的な意義・有用性を感じられたか」に対しては93%が肯定的な回答を示し、学生の理解度および満足度の高さが伺える。

- ・学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

「データサイエンスへの誘い」において、97%の学生が授業を推奨すると回答した。前年よりさらに推奨度が向上し、プログラムの評価がより定着している。

- ・全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

令和6年度のリテラシーレベル修了者数は326名で、令和3年度からの累計で、1,140名の修了者を輩出したことになり、収容定員5,719名の20%を達成し、計画目標18%を達成した。令和6年度の応用基礎レベルでも261名が修了し、令和5年度から520名の修了者を輩出したことになり、収容定員の9%に到達した。

3. 「学外からの視点」における自己点検・評価の結果

- ・教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

今年度初めての卒業生を輩出した。卒業予定者に対して進路等のアンケートを行った。有効の回答があったうちの63%が大学院への進学を予定している。次に多かったのが、医療系への就職で、12%、そして、IT系への就職が9%となっている。就職先での活躍状況及び企業での評価は次年度以降になると考えている。

- ・産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

外部評価委員のNOB DATA 株式会社代表・大城信晃氏による評価では、徳島大学の「情報科学入門」「データサイエンスへの誘い」「AI 総合演習」の各授業は、従来のデータサイエンス教育として十分に機能しているとのことである。また、高校で「情報I」を履修した学生と従来の学生との基礎知識の差にも適切に対応している点が評価された。

一方、生成AI技術（特にChatGPT）を活用した先進的な教育手法については高く評価しつつも、課題があることも指摘された。特に、生成AIに依存しすぎて批判的な視点や知識の定着が不足する問題への対処として、生成AIとの会話ログを評価に取り入れるなど、「思考プロセス」を評価する新たな手法の確立が必要と提言された。

生成AI技術が急速に発展し、社会がそれを「当たり前の技術」として受け入れる時代を見据え、大学教職員が最新技術に追いつくためのキャッチアップ、学生に生成AIとの正しい向き合い方を指導する必要性が強調された。また、AIを効果的に利用するための「基礎技術」や解決すべき課題を自ら設定する能力を育成することが不可欠であるとの意見が示された。

4. その他

- ・数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

前年に引き続き、企業のデータサイエンティストによるオンライン講義を導入し、学生の意欲を喚起している。将来的な有用性を実感させる取り組みは成功しており、今後も継続する。

- ・内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

今後とも、学生による授業評価アンケートにもとづくFDを継続的に実施する。また、本教育プログラムのサポートサイトについても毎年見直しを行い、授業内容と教育水準の改善を図る。このためのe-learningコンテンツの開発を行い予習復習、確認テストが受けられる体制を準備するという課題が令和3年度に提起されていたが、現在の対応はまだ不十分であるのが現状である。これは、高等学校での「情報」の必修化を受けた大学における「情報科学」教育の検討が必要となっており、教材作りの活動に移行できないことによる。

データサイエンス教育は今後、さらに重要性を増すことが予想される。そのため、学修プログラムの修了者の増加を目指す取り組みは今後も続ける必要がある。また、プログラムの内容や水準の維持に加えて、学生へのわかりやすさの向上など、さらなる進歩を期待したい。